

## 大源太川北沢本谷

2008年10月26日(日)  
L.釣、奥平、金井(記)

10月半ばの3連休の滑床渓谷で今シーズンは沢納めと思っていた。釣さんと奥平くんが例会で初心者対象に25・26日で『豆焼沢』の募集をしていたが、参加者がなく、「では、裏妙義にでも日帰りで行きます。」とのことだったので、『北沢本谷』に行けるなら参加したいと申し出た。即OK。

14年ほど前に北沢本谷に行きたかったのが、不本意ながら七ツ小屋裏沢になってしまい、何時か遡行したいと思っていた。

25日(土)の夜、奥平くん金井宅まで来てもらい、ご近所の釣さんに夜9時半頃迎えに来てもらう。10時に出発し12時過ぎに『大源太山登山口』の標識のある林道に入る。真っ暗なので良く分からなかったが無人の小屋のような家があり、その2階の屋根ありのテラスにテントを張らせてもらう。翌朝見ると、横の下にテニスコートが何面もあり、テニスコートのクラブハウスだった。車で林道終点の駐車場に行く。

7:30出発。登山道はすぐに橋で本流を左岸に渡り、7:25村木沢出合いに着く。登山道はトラロープを伝い北沢本谷を渡りヤスケ尾根を上って行く。7:45ここから入渓。紅葉が美しく、溪相も美しく空は曇っているが心が躍る。3m~4mの滝を3つ越え(かなり岩が滑りやすい) 8:05美しい4条5mの滝に出会う。濡れるのが嫌で小ルンゼを使い左岸を巻く。8:30七ツ小屋裏沢が左岸から1:1水量比で流入。ここまでは倒木もなく沢が美しかったが、この先から倒木やそれに引

かかった小枝が出てくる。但し人間が捨てたごみは全然ない。3mの滝は「えっ!行くの!」濡れたくないと言っていたのにと聞こえそうなセリフを背に、水線の右を越える。兎に角、滑りやすい。次の4mの滝は登れず、続く3mの滝と一緒に右岸を高巻き懸垂で沢床に降りる。3m滝の右壁にトラロープがあり、それを使い乗越す。

2条4m滝の次の4m滝は水を被り、水洗のすぐ左をぎりぎりのホールドとスタンスで越える。久しぶりに真剣になった。誰かが「金井さんの2点支持!」と言っていた。滑床渓谷でゴム底の溪流靴で懲りているはずの奥平くんは懲りもせずに片足ずつゴム底とフェルト底の靴を履いている。「また、どうしてそんな靴で来るのよ!」との問いに「イヤー!スラブが快適だから・・・。」とのたまう。

続いて2条2mの滝。溪相が美しい。沢が右に曲がる場所にある6mの滝は右壁を登る。10mの斜めになっているナメ滝は右岸ぎりぎりのところを灌木や笹を掴み登る。滑りやすく要注意!男性2人はひどく寒がっていて「金井さん、寒くないの!」と聞かれるが、全然寒くない。

10:00三俣の手前の広河原。初めて休憩するが、男性二人は風も強く寒い寒いと言い、岩陰に潜み、それぞれ黄色いツェルトを被り首から上だけを出している。あまりの珍妙なかっこに吹き出してしまふ。右に七ツ小屋沢の30mの急なナメ滝、正面に見晴台の沢が細く白い筋のように見え、左に北沢が20mの滝を掛けている。10:20発。滝の左岸のリッジ状の岩壁を1段登るとさらに細く馬の背のようなリッジになる。さらにヤブの中に入り滝の落ち口上部に出るのだが、かなりいやらしかった。

次の3段12mの滝は下からでは3段目が見えない。1段目は右から登り、左に移

って2段目を登ると3段目が見える。3段目も左から登る。すぐ上で二俣。左に入る。5mほどの滝。次の7m3段のチムニー滝は狭く奥まって暗く、オポジションで登る気にもなれず、さっさと左岸を高巻く。4~5mの滝が続き、さらに小滝が続く。右岸から涸沢が入ると10mの滝。右岸を登りプッシュの中へ。スラブ状の岩場にプッシュや草、笹がまじり、松田さんの言う『いなかスラブ』!だんだん腕が疲れてきて、12:30スラブの途中の急な岩場の上で昼休み。

奥平クンはゴム底のフリクションがとても良いと喜んでいる。大体はザラツとしたフリクションの良いところが多いが、部分的にツルツとしたところや非常に急なところがあり。気が抜けない。腕もひどく疲れる。山頂の右下の登山道に出て、1:45大源太山頂着。眼下に旭原の町が見え、昨晚泊めてもらったテニスクラブも見える。一休み後、転げそうに急な道をトラロープ、鎖を使い下山開始。山の上部は所々紅葉が残るが既に冬枯れていたが、中腹は本当に美しい紅葉だった。今年の紅葉は台風が少なかったので葉擦れがなく、近年になく紅葉が美しいそうだ。

入渓地点に向かって急な道が続くが、10ピッチ以上のトラロープが張られており、とても楽に降りられた。村木沢出合いに3:40着。駐車場に4:10着。

小粒ながら変化に富み、十分に楽しめる良い沢だった。

